バンドリの日常

堕人間（２１）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこにでもいる高校生とどこにでもいる可愛いガールズバンド達との何気ない日常集

を駄文で綴るだけの小説

目　次

ベースなあの子と ―――― 1
ツンデレなあの子と ―――― 4

ベースなあの子と

「んふー」

語尾に音符が着きそうなほどご機嫌な様子を見せる彼女は、今俺の膝の上に頭を乗せている。

彼女曰く、俺の膝の上は落ち着くらしい。

俺も彼女の膝を借りることがあるが、明らかに彼女が俺のを使うことの方が多い気がする。しかも、他にも何人か使う奴がいるし、どいつも使用頻度が高いし、高評価しか貰わない。

男の膝枕なんて誰得なんだか。

むしろ膝枕してほしいのは俺の方なのに。

彼女いない歴＝年齢であるこの俺に少しでも癒しと温もりと愛をください。まぁ、癒しと温もりをくれるやつは結構いるんだけどね？

そこリア充○ねとか言うんじゃない。

そこに愛はないから。

…自分で言ってて悲しくなってきた。

ま、まぁ？皆美人で可愛い子たちだし？バンドやってるし？バイト先の先輩も可愛いし？膝枕してくれるし？なんだったら添い寝もしてくれるし。ある意味勝ち組じゃね？1人おっぱい付いたイケメンもいるけど。

いや、俺のリア充（笑）の話なんて今はどうでもいいんだよ。問題はこの現状がかれこれ3時間も続いてるってことだ。そろそろ足の感覚が無くなってきたんだけど、こいつどく気配が微塵も感じられない。確かに膝枕をする頻度は高いけど、だからといって正座に慣れるって言うわけではないのでしてマジで下半身つらたんなんだけど早くどいてくれないかなぁ。しかも頭撫でたりポンポンしたりとかのオプションも追加で頼んでくるし。お兄さんの足の神経はボロボロだよぉ…。

「んふーんふふーふふふーん」

…だけどさぁ、こんなに幸せそうな顔してたらどいてーなんて言えないよなぁ。

こいつも日頃はバンドの中でお姉さんしてて誰かに甘えるってことがあまりないから、こうやって甘えることができるのが嬉しいんかね。

とか言ってたら、猫耳とか尻尾とか見えてきた。ゴロにゃーんとか言いそう。たまに口がωになる時あるし。

いやそれお前のバンドのボーカルの仕事じゃね?お前がなってどないすんねん。でも、案外似合うかもしれん。Ａｍａｚ〇ｎで買って今度お願いしよ。尻尾は…健全なのにするか。

◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊

結局夕方位までで今回の膝枕が終わって、流れでそのまま夜ご飯を作ってくれることになった。見た目ギャルのくせにめっちゃ家庭的でギャップがたまらんとです。

我が家は親父の単身赴任にお袋が着いて言ったため、家に俺しかおらず毎食自分で何とかしなければならないから今回のような申し出はとってもありがたいのだ。俺も一応料理できるが、やっぱり可愛い女の子に作ってもらった方が嬉しいし。

こいつの飯は美味しいし栄養バランスもいいしで、将来いいお嫁さんになる。むしろ俺が嫁に欲しい。

みたいなことをこの前言ったら顔真っ赤にして怒られました。ちくせう。でも可愛かったです。

ただ、ちょうど昨日冷蔵庫の食材を全部使ってご飯を作ってもらったため庫内は空っぽなので先にお買い物に行った。

この街にはショッピングモールと商店街があるが、俺は商店街派だ。

ショッピングモールの方が種類豊富に売ってるけど、昔から商店街で買い物してきて八百屋のおじさんや魚屋のおばちゃん達と仲がいいのもあるし、知り合いが結構いるってのが大きな理由だ。仲がいいとたまにおまけしてもらえたりするし。ヴィヴ・ザ・人情!

てな訳で美少女と夜ご飯なうです。

いやー、美少女と一緒に飯食べると一層美味しくなるな。

２人で食卓を囲むと夫婦感がめっちゃ出るね。将来はマジでこの

子みたいなこと家庭持ちたいわ。子供は男女一人ずつで、女の子が先かなー。

しかし、何故かこいつは俺の顔を見ながらニコニコしてやがるが俺が飯を食べる姿はそんなに面白いのか？って気になったけど

「俺の顔見てて面白いか？」

「面白いってか幸せって感じかなー？」

「なんじゃそりゃ…」

みたいなやり取りがあったりなかったり。

相変わらずよく分からんけどこいつが幸せそうならまぁいいか。

でも、こいつには色々と飯やら家事やら勉強やらで色々お世話になってるから頭が上がらん。

自分が所属してるバンドや学校でもみんなの世話をしてるらしいし、そんなんだから皆からリサ姉なんて言われるんだよ。

ツンデレなあの子と

唐突だが、ツンデレっていいと思わない？
素直になれない女の子が照れ隠しで顔を真っ赤にして「ち、ちげーし！」とか「あ、ありがと…」とか言っちゃった日にはもう悶えまくりですよ。
世の中の全てのツンデレ好きに届け！こいつの可愛さ！そして抱きしめて！宇宙の果てまで！
はい、ツンデレも大好きな俺です。
いやー、ツンデレっていいよね。なんでいきなりツンデレの話をしたのかって？いるんですよ、周りにツンデレが。てか、目の前であんみつをハムハム食べてるんだけどね。
はい、キーボードのこの子です。
「いや、急に手でどうぞされても分かんねーし」
「そこはほら、有咲の類まれなるトークセンスで」
「無茶振りやめろ！ただでさえ疲れるヤツがバンド内に2人もいるのにこれ以上苦労を増やすなよ！」
「ははは」
「露骨に話を終わらすな！」
今日も今日とてツッコミが冴えてる市ヶ谷有咲15歳。
知る人ぞ知る花咲川女子学園1年生きっての秀才兼ツッコミ兼保護者兼ツンデレ。
金髪で、ツインテールで、おっぱいぼんっで、盆栽いじりとネットサーフィンが趣味の属性盛りすぎてキャッツカフェのアンビリーバブルパフェみたいになってるこの美少女と俺は今デート中である。
羨ましいか？羨ましいだろ？なんでお前みたいなやつが有咲ちゃんとデートなんかしてるんだよクソ野郎とか思ってんだろ？
デートじゃないから安心しろ。
有咲も「デ、デートじゃねーし！」ってバンドメンバーに言ってた

し。

少しくらい俺に期待させても良かったんじゃないですか…。悲しい。

まぁ、デートじゃなくても2人で遊びに行ってるだけで俺は幸せだしいいんだけどね。

てなわけで、からかうと反応が大変おも…可愛らしい有咲さんにイタズラしようと思いまーす。初めはアーンからで。

「有咲、有咲」

「…なんだよ」

「それ美味しい？」

「…美味いよ」

「そーなんだー、食べてみたいなー」

「…頼めばいいじゃねーか」

「全部食べれる自信ないしー、1口でいいしー」

「あぁもう！語尾を無駄に伸ばすな！欲しいなら欲しいってちゃんと言えよ！」

「やったー！それじゃ、あ…」

「…ほら、食えよ」

!!!!!!

ありさが　さきに　あーんを　してきた　!!

まさか、先制攻撃をしてくるなんて。

ついこの間まで中学生だった、まだ幼さを残す可愛らしい顔をうっすらと朱に染め、しかしながら大人への階段を登りかけているような色っぽさを含む潤んだ瞳でこちらを上目遣いで見ながら、寒天とあんこを載せたスプーンをこちらへとそっと差し出すその姿はまさしく天使。

心臓の鼓動がやばい。マジＨｅａｒｔ　ＢＥＡＴ。

危うくすぐに指輪を渡して結婚を申し込むところだったぜ…あぶねぇ。

この子めちゃめちゃ可愛いんだけど嫁にもらっていいですか？絶対幸せにしますから。え、だめ？有咲がいないと香澄の制御ができな

い？確かにそうだな…。
　んなら香澄とセットで貰うわ！
「…なぁ、食べないのか？」
　そうだそれがいい。名案だわ。俺は可愛い子２人を嫁にできるし、香澄は有咲と一緒にいられるし、有咲もツンデレができる。
　いいことだらけじゃないか。すぐに実行に移そう。あ、でも指輪二人分必要になるのか。ちょっとその資金が無いから待っててもらわないと。
「無視すんなよぉ…」
「有咲」
「な、なんだよ…。早く食べてくれよ…」
「待っててくれるか？」
「今現在待ってるんだけど…」
「いつか香澄と一緒に奪いに行くからな」
「何の話だよ…。なんで香澄が出てくんだよ…！」
「ちゃんとおばあちゃんに挨拶しに行くからな」
「もうなんでもいいから早く食えよ！」
　口の中にスプーン突っ込まれた。
　あんみつ美味しい。

◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊◊

　あんみつを美味しく頂いた俺と有咲はその場で解散…ということも無くブラブラとモールをウィンドショッピングしていた。
「一体なんだったんだ…」
「何が？」
「お前の奇行だよ！」
「有咲、人が沢山いるから大声は迷惑になるぞ」
「～っ、っ、うぅ～っ」
　何だこの可愛い生き物。語彙力が低下するわ。
「やっぱり有咲は可愛いなぁ」

「っのバカ！」
褒められて顔を真っ赤にする有咲可愛すぎさね。語彙力の低下が多段化するのが分かる。
俺もう有咲を顔真っ赤にするのを生きがいにするわ。
「有咲っ、有咲っ」
「…なんだよ」
「今度いつデートする？」
「…来週の日曜日がいい」
「ごめん、その日はひまりとコンビニスイーツ巡りが入ってるわ」
「そういうところだかんな！そういうところだかんな！」
今日も有咲が可愛い。